

令和3年度 国産材の安定供給体制の構築に向けた 第3回 四国地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和3年12月21日（火）13:30～15:30
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

（1）冒頭挨拶

○四国地区需給情報連絡協議会 本山 会長（高知県素材生産業協同組合連合会 代表理事）

令和3年度第3回四国地区需給情報連絡協議会に参加いただき感謝申し上げます。国内の新型コロナウイルスの感染者数は落ち着きが見られるものの、新たな変異株による感染者も発生し、引き続き留意していく必要がある。ウッドショックによってヒノキ柱が高騰し続けてきたが、7月頃をピークに下落してきており、今後全体的に落ち着いてくるものと思われる。本日は、各構成員から現状や見通しなどについて忌憚のない意見をいただき、皆様と情報共有していきたいと思うのでよろしくお願ひしたい。

（2）議事

○高知大学 川田 名誉教授（以下、座長）

輸入材や国産材の状況について、前回の報告において高止まりしつつも入手できてきている状況とのことであったが、四半期経過し、現状について林野庁から資料の説明をお願いする。

○林野庁 木材産業課 永島 課長補佐

資料1～3及び参考資料について説明。

○川田 座長

輸入量については、若干の回復傾向が見られるが、米国では製材品価格が暴落したものの、再度上昇傾向にある。カナダ材は集中豪雨の影響が出ている。国産材、輸入材とも高止まりしており、製材工場では高い稼働率を維持して出荷が続いている状況とのことである。

まずは、川下のほうから、部材の入手状況、新規受注、価格転嫁の状況、代替材への取組状況などお聞きしたい。

○（一社）JBN・全国工務店協会 山田 理事

部材の調達に関しては、価格は高止まりしつつも、安定して調達できている。合板については毎月価格が上がっていて、卸会社でも調達が難しい状況。受注に関しては、パワービルダーは伸ばしているが、地域の工務店は、新築の受注は厳しい状況であり、リフォーム、リノベーションにシフトしているところもある。価格の見通しは、現状と変わらないと思う。弊社は輸入材を使わず、ほとんどが徳島県産スギ材なので今後も安定調達できると思う。

話は変わるが、先日シンポジウムに参加する機会があり、大径材の利活用方法の紹介があった。自分も今はそこに一番興味があり、地元の林業会社の方と議論しながら利用方法を考えていきたい。

○全建総連 四国地方協議会 高知県建設労働組合 田部 副組合長

自分のところは、合板などは大量に使うわけではないので買いたい分は調達できている。

価格は米松は上がり、国産材も市場では上がっているようだが、弊社は製材品も地元で商売しているところから調達しているの、そこそこの値段で調達できている。木材よりも、その他の住宅資材の値段が上がっており、そうした資材調達に苦労している。

○マツシマ林工(株) 総務課 吉本氏

部材の調達に関しては、値段は高いがなんとか調達できている。梁、桁については、集成材は高すぎて、一部の工務店では米マツ製材品に替えているところもある。スギ、ヒノキも高いがなんとか調達できている。合板に関しては、厳しい状況であり、一部、12mmのOSBを使っているところもある。受注に関しては、10月の緊急事態宣言解除以降、かなり受注できしており、10-12月は稼働率が上がっている。例年1～2月は受注が落ち着くが、この年明けも同様と考えている。

○川田 座長

合板不足によって、合板からOSBに代替している事例もあるとのことだが、国産材の製材を使う考えはないか。また、大径材利用の取組を本格的に進めていきたいとお話もあったが、それについて話をお聞きしたい。

○マツシマ林工(株) 総務課 吉本氏

OSBの産地はカナダ材であり、元々在庫があるところから分けてもらったもの。顧客にOSBか野地板のどちらかに替えてもらえないか、と提示したところ、結果的にOSBのほうが多かった。

○(一社)JBN・全国工務店協会 山田 理事

シンポジウムではかなり特殊な使い方をしている事例が紹介されていた。大径材の利用にあたっては、丸太や製材等どのような形態で使うのかや、歩留まりの考え方をどうするかなど奥が深いと思う。自分としては、顧客に対して住宅部材としての大径材の価値を認めてもらえるような設計、建築を目指していきたい。

○川田 座長

続いて、製材、流通関係から、稼働状況や生産体制、安定供給体制の構築に向けてどのような取組がされているかなど、話をお聞きしたい。

○高知おおとよ製材(株) 宗国 工場長

原木が順調に入荷しているので、安定的にフル生産できている。10-12月に入荷した原木は3m材が多く、4m材は少なかったが、来月以降は4m材が増えそうである。市場では3mの柱が中心なので、3m材の入荷が減ってしまうと厳しい。集成材については、親会社の銘建工業も同様だが、コンテナ不足の影響で原料のラミナが入りづらい状況。製品価格は少し下がりがつつあるが、顧客からの注文は安定しているので、1-3月はフル生産で対応する方針。

工場で使うモーターやシーケンサー、リレースイッチ等の部品を注文するが、入荷するまで半年も掛かる場合があり、調達しづらくなっている。住宅にもスイッチが使われているので、影響があるのではと心配している。

長期的には国内の住宅着工戸数は減少するので、輸出も視野に認証材の取組も進めていきたい。

○八幡浜官材共同組合 菊池 代表理事

弊社はヒノキを製材している。丸太価格の低下の情報は顧客も把握しており、製品価格もいずれは下がると見越したようで、最近、新規の注文が急になくなった。年明け以降、在庫が増えて値段が調整されてくるようになれば、注文も回復すると思う。

○ウッドファースト(株) 伊藤 代表取締役

スギ原木はこれまで順調に入荷していたが、12月になると入らなくなったため、在庫が少し減ってきており不安である。一方、これまで入荷のなかったヒノキ原木が12月から入るようになった。生産状況は、フル生産であるが、注文内容は105幅や105角に偏っており、歩留まりが悪い。販売状況は、今月から顧客が在庫調整に入ったようで、少し厳しさを感じている。年明け以降は、外材の入荷状況の影響を受けると思う。

○(株)久万木材市場 片岡 営業課長

原木の入荷量は、10月から増加傾向にあり、今月は去年の同時期よりも10%増加している。年明けの1月も今月と同程度の入荷量になると予測しているが、2月以降は降雪の影響を受けるので予測できない。価格は、原木入荷量が増加したことに伴い、11月から下がり始め、今は下げ止まりの状況。

○丸和林業(株) 福元 常務取締役

弊社はチップ製造がメインで、製紙会社やバイオマス発電所に納品しており、安定的に購入していただいている。

ウッドショックの影響で原木が不足し、これまで市場に出されなかったような低質材も市場で取引されるようになり、原木入荷量が昨年度と比較し20%も減少してしまった。原木価格が下がり始めたため、今後、素材生産量が減少し、原材料となるC材がさらに不足しないか心配している。

素材生産も行っており合板工場へも出荷しているが、合板用原木不足といった関係は弊社では影響を感じていない。

○川田 座長

続いて、川上の状況について、現在の生産状況や今後の生産見込み、森林所有者の動向、立木や原木価格の今後の適正価格について、どのように考えているか、素材生産業者から話をお聞きしたい。

○(株)とされいほく 石垣 代表取締役副社長

今年度の原木の生産量は、11月末時点で約2.3万m³であり、3月末までに3.3万m³前後になる見通し。月々の生産量としては安定供給できている。ウッドショックは一時的なものと考えており、機械の導入や新規雇用など増産に向けた投資はできない。素材生産側としては製材工場等と協定がない限り、単価の高いところに出荷するということになる。木材価格が高いことは山主にも情報が入っていると思う。

○(株)伊藤林業 伊藤 代表取締役

9月以降、天候にも恵まれ順調に出荷できている。10月中旬以降は市場価格が下がってきているが、下げ止まり感がある。ウッドショックで木材価格が上がっており、若干高く仕入れた山もある。

今後については、標高の高い山では既に2回ぐらい降雪しているが、年内は作業ができると思う。年明け以降、雪が沢山降れば、現場は一時的に止まるのではないかと。

○四国地区需給情報連絡協議会 本山 会長(高知県素材生産業協同組合連合会 代表理事)

素材生産については、例年と同じ量を生産している。価格は中目材については高い時期もあったが、11月に入り例年より少し高い程度まで下がってきた。急激な木材価格の変動を踏まえ、仕入れについては、もう少し安定してからするつもりで控えていたため、大きな影響はなかった。

○川田 座長

ウッドショックに対して、製材、加工の領域は、比較的敏感に反応するような雰囲気があったが、川上の領域では、今後価格が下がると見込まれる中で生産量を増やす雰囲気ではなく、また、間伐や保育に軸を移したところであり、立木の購入から伐採までの手続き等に時間を要するため、臨機応変に対応するには限界があった。それでも何らかの形で政策的に、あるいは業界の連携により進んでいかないといけない。いずれにしても、外材の輸入情勢が不安定で、木材価格が高止まりしている中、将来の国産材の生産流通体制の構築は欠かせない課題である。こういう時期だからこそ、供給体制をどのように作り上げていくのかを検討する重要なチャンスである。

○高知大学 農林海洋科学部 松本 講師

今回のウッドショックを国産材の優位性が発揮できる好機と位置付けて、どのような対策ができるかを長期的な視点で考えていく必要がある。

懸念事項としては、山側の労働力の確保。急に人や機械を手当てして増産することは困難。コロナ前に戻すということであれば、安定的に需要を確保できる状況を作らなければならない。協定取引や平時に連携をしていれば、ウッドショックのような非常時でも相互支援ができ、取引も安定できる。メインの流通のみを視点に充てて議論しても、木材は色々な部材が出るので不十分で、話があったような大径材の活用や認証材といった視点からも議論が必要。

木材全体の付加価値を高めていくという努力を川上、川中、川下全体で取り組んでいく必要がある。木材利用に付加価値を付け、価格を下げないこと、山側の経営力の強化、雇用環境の改善等により生産能力を維持していくことが重要である。行政や建築設計の分野でも木材利用、国産材利用のPR強化が必要。

例えば、これまでは税制優遇や補助による支援が主であったが、今後は意識付けをどう強化するかといった視点から一定量の木材利用を課すという制約型の方法に切り替えても良いのではないかと。また、環境保全や防災・減災を意識した森林整備をしていると所有者や行政が宣言すれば、木材生産だけの価値では無くこれまでは評価されていない外部経済も内部化することにより、所有者等が所得補償を受けられるなどの素地づくりに取り組んだり、幅広い視点で議論する必要がある。今後消費のベースになる非住宅の支援についても、大径材の特殊加工などを支える等の地域材を使った地場の流通を支える動きも重要と思う。

○川田 座長

木材を使う動機付けをあらゆる領域から攻めることが必要。木材産業の領域だけではなく、国民が木材を使うことによって地域経済を支える、ひいては人々の幸福につながるというSDGsの取組として木材を位置付けていくことが重要ではないかと思う。

次に、林野庁から令和3年度補正予算の内容について、説明をお願いしたい。

○林野庁 計画課 川本 課長補佐

資料4～7について説明。

○川田 座長

本日は皆様から色々なご意見をいただいた。林野庁からの話にもあったように、これから新しい連携を図りながら国産材の供給体制をどう作り上げていくのか、それぞれの立場で考えていかなければならないと思う。本日は長時間にわたりご協力いただき感謝申し上げます。

(以上)